



## 共同研究プロジェクト

全国共同利用研究所である本研究所にとって、所員が中心となって所外の研究者と共同で推進する共同研究プロジェクトは、最も大切な研究業務のひとつです。

これまで数多くのプロジェクトが組織され、研究会が活発

に開催され、研究成果は400点を超す出版物をはじめとして様々な形で公開されています。

現在、次のとおり、25のプロジェクトが進行中です。

	プロジェクト名	年度	主査/ 所外代表	人数			主に関連する 研究ユニット /センター		
				所内	所外	合計			
重点	言語の構造的多様性と言語理論 —「語」の内部構造と統語機能を中心に	'05-'09(5y)	中山 俊秀	6	15	21	言語動態	p.9	
一般	遼・金・西夏に関する総合的研究—言語・歴史・宗教—	'07-'09(3y)	荒川 慎太郎	2	18	20	情報資源戦略	p.10	
	宣教に伴う言語学	'06-'08(3y)	豊島 正之	1	3	4	情報資源戦略	p.15	
	朝鮮語史研究	'05-'08(4y)	伊藤 智ゆき	2	9	11	情報資源戦略	p.14	
	言語接触と系統継承：大湖地域から南部アフリカにかけて話されるバンツー諸語と隣接言語の記述研究	'07-'09(3y)	稗田 乃	2	13	15	言語動態	p.10	
	総合人間学の構築	'07-'09(3y)	中谷 英明	7	29	36	コーパス	p.11	
	人類社会の進化史的基盤研究(1)	'05-'09(5y)	河合 香史	4	14	18	文化動態	p.20	
	ムスリムの生活世界とその変容—フィールドの視点から*	'05-'09(5y)	大塚 和夫	8	34	42	文化動態	p.19	
	表象に関する総合的研究	'06-'08(3y)	高知尾 仁	4	7	11	文化動態	p.14	
	脱植民地化の双方向的歴史過程における「植民地責任」の研究	'07-'09(3y)	永原 陽子	2	27	29	政治文化	p.11	
	ペルシア語文化圏の歴史と社会*	'07-'09(3y)	近藤 信彰	4	27	31	政治文化	p.12	
	マレー世界における地方文化*	'05-'09(5y)	新井 和広	4	21	25	政治文化	p.18	
	東アジアの社会変容と国際環境	'06-'10(5y)	中見 立夫	3	32	35	政治文化	p.17	
	タイ文化圏における山地民の歴史的研究	'06-'10(5y)	クリスチャン・ダニエルス	3	10	13	政治文化	p.16	
	チベット=ビルマ系言語から見た文法現象の再構築 1: 格の体系とその周辺	'07-'08(2y)	澤田 英夫	3	11	14	IRC	p.12	
	ドイモイの歴史的考察	'04-'07(4y)	栗原 浩英	1	8	9	IRC	p.18	
	中国系移民の土着化/クレオール化/華人化についての人類学的研究	'03-'07(5y)	三尾 裕子	2	20	22	IRC	p.15	
	社会空間論の再検討—時間的視座から	'07-'09(3y)	西井 涼子	5	14	19	FSC	p.13	
	「シングル」と社会—人類学的研究	'07-'09(3y)	椎野 若菜	2	17	19	FSC	p.13	
	「もの」の人類学的研究—もの、身体、環境のダイナミクス	'07-'09(3y)	床呂 郁哉	4	18	22	FSC	p.14	
	マルセル・モース研究—社会・交換・組合	'06-'09(4y)	真島 一郎	3	4	7	FSC	p.17	
	東地中海地域における人間移動と「人間の安全保障」*	'04-'07(4y)	黒木 英充	4	23	27	FSC	p.19	
	所外代表	漢字字体規範史の研究	'07-'09(3y)	石塚 晴通	1	7	8	情報資源戦略	p.21
		語彙と文法	'07-'09(3y)	梶 茂樹	3	3	6	情報資源戦略	p.21
		インドネシアの国語政策と言語状況の変化	'06-'07(2y)	森山 幹弘	2	10	12	文化動態	p.21

\*が付されたものは、「中東イスラーム研究教育プロジェクト」(p.28)とも関わりを持つプロジェクト。



## 共同研究プロジェクト

## 重点共同研究プロジェクト

言語の構造的多様性と言語理論  
—「語」の内部構造と統語機能を中心に

# 語

「語」は人間言語に普遍的な重要な構造単位・ドメインであることは異論の余地のないところである。しかしながら、同時に、「語」は通言語的に、内的構造の上でも、統語的性質の上でも幅広い多様性を見せる。それゆえ、「語」というドメインが文法体系の中で担う機能的役割は言語によって大きく異なる。

そこで、本プロジェクトでは、形式的単位としての「語」について通言語的に適用しうる定義を確認し、そのうえで、「語」が通言語的に見せる構造的多様性(内的構造の組み立て方・複雑さについての多様性)および機能的多様性(統語法との間の役割分担のあり方の多様性)の幅を探ることを目的とする。

今年度は特に品詞分類の問題に焦点を当て、形態法と統語法の交点にある「語」の性質を通言語的に捉えてゆく。

[主 査]	中山 俊秀				
[所 員]	澤田 英夫	荒川慎太郎	呉人 徳司		
	塩原 朝子	星 泉			
[共同研究員]	阿部 優子	江畑 冬生	蝦名 大助		
	風間伸次郎	加藤 昌彦	加藤 重広		
	角谷 征昭	児島 康宏	沈 力		
	塚本 秀樹	永井 佳代	長崎 郁		
	永山ゆかり	山越 康裕	渡辺 己		



中国・新疆ウイグル自治区阿克陶県ウジュマ郷のコンサク・マザール(イスラーム聖者廟)  
撮影者：菅原純



クワギョトル族の伝統的デザイン  
(カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州、クワドラ島にて) 撮影者：中山俊秀



## 共同研究プロジェクト

### 一般共同研究プロジェクト

#### 遼・金・西夏に関する総合的研究 —言語・歴史・宗教—

10-12世紀、中国北部・西北部に成立した遼・金・西夏は、東洋史上でも特異な位置を占める。昨今は従来の漢文史料資料による研究のみならず、各国語独自の文字解読の進展、新出土資料の考古学的知見などにより、それらの研究は新たな局面を迎えつつある。

遼・金・西夏の研究は、それぞれの国家の独自性、各国語文字資料の特殊性などから、これまで個別に行なわれることが多かった。しかし近年では諸分野・諸地域にまたがった研究課題も増加してきた。従来の漢人世界中心の枠組みを見直すとともに、当時の北方地域を多角的・統合的に検討しなければならない。

本プロジェクトは、各国の言語・歴史・宗教という、広い領域にわたる研究者をメンバーとする。共同研究員が互いに情報を共有し、意見を交換して、より大きな視野でそれぞれの研究課題を捉えることを目的とする。また、「遼金西夏研究会 (<http://homepage3.nifty.com/liaojinxixia/>)」とも連携して研究発表を行い、成果を一般に公開する。

[主 査]	荒川慎太郎			
[所 員]	中見 立夫			
[共同研究員]	井黒 忍	白杵 勲	大島 勝俊	
	小野 裕子	佐藤 貴保	佐藤 友則	
	澤本 光弘	白石 典之	高井 康行	
	高橋 学而	武内 康則	武田 和哉	
	藤原 崇人	船田 善之	松川 節	
	向本 健	毛利 英介	渡辺 健哉	



2006年9月 中国内蒙古自治区エチナ旗 西夏～元代の遺跡「カラホト」城内にて。半ば砂に埋もれた、北区画にある寺廟跡。撮影者：荒川慎太郎

#### 言語接触と系統継承：大湖地域から南部アフリカにかけて話されるバンツ語と隣接言語の記述研究

大湖地域から南部アフリカにかけて話されているバンツ語とその隣接諸言語を、既に現地調査を行った研究者を中心に、それらの言語の記述的研究の諸問題について明らかにするとともに、これまで各研究者が個別に得た成果を共同研究において総合し、討議することにより、この地域に特徴的な言語現象(音韻論的、形態論的、統語論的特徴)を探り出し、それらの言語現象をもたらした原因を探る。

この地域は、古代より人、物、文化の移動する重要な経路であった。様々な言語を話す人々がこの経路を通った。その結果、一つの言語的に特異な地域を形成した。言語接触と系統継承を解きほぐすことにより、この地域の特異な言語現象の実態を明らかにする。

[主 査]	稗田 乃			
[所 員]	椎野 若菜			
[共同研究員]	安部 麻矢	阿部 優子	加賀谷良平	
	梶 茂樹	角谷 征昭	神谷 俊郎	
	品川 大輔	高村美也子	中川 裕	
	宮崎久美子	湯川 恭敏	米田 信子	
	若狭 基道			



タンザニア、マンゴラ村では、ダトーガ語(ナイル・サハラ)、イラク語(アフリジアン)、ハツツァ語(コイサン)、スワヒリ語などバンツ語(ニジェール・コンゴ)というアフリカ4言語ファミラム全ての言語が話されている。多言語使用は明らかだが、言語接触はどうなるか。撮影者：稗田乃

## 総合人間学の構築

近年の科学技術の飛躍的進展は、地球という自然ばかりでなく、人のこころという自然をも改変しようとするに至っている。これに伴って生起している深刻な国際的、社会的、個人的諸問題は人文・社会科学に迅速な対応を迫るものである。本プロジェクトは、人文・社会科学を社会と科学・技術に対していっそう開かれたものとすることによってその方法論を刷新し、すべての人々にとってのよりよい社会のあり方を考察する基盤科学として確立することに貢献しようとするものである。この目標に向かって本プロジェクトは新学術領域「総合人間学」を構想する。

諸領域の研究者の直接対話の継続的な場としての総合人間学は、(1)世界諸地域の諸状況を俯瞰し、(2)先端科学技術の最新成果を吟味しつつ、(3)人間の生物的特性および諸文明の精神伝統の正確な把握に基づいて、(4)よりよい未来世界のあり方を考察する。こうして個別学術領域の限界を超え、世界の急激な変化にも即応する、柔軟でかつ体系的な総合的基礎研究の恒久的な場の構築に努める。

[主査]	中谷 英明				
[所員]	峰岸 真琴	荒川慎太郎	芝野 耕司		
	床呂 郁哉	真島 一郎	宮崎 恒二		
[共同研究員]	池本 幸生	石堂 常世	市川 裕		
	井原 康夫	内堀 基光	内山 勝利		
	大津 透	丘山 新	小川 正廣		
	柿木 隆介	笠井 清登	亀山 郁夫		
	河井 徳治	黒田 彰	後藤 敏文		
	新宮 一成	杉下 守弘	杉本 良男		
	中島 隆博	中島 秀人	中田 力		
	長野 泰彦	納富 信留	日高 敏隆		
	寶珠山 稔	松井 健	松尾 剛次		
	丸山 徹	水野 善文			



第2回総合人間学国際シンポジウム「諸文明から未来世界を構想する」(平成17年10月22・23日新宿サンスカイルーム)左から石井、宮崎、内堀、Galey、Rischar、Aymard、日高、金、中谷

## 脱植民地化の双方向的歴史過程における「植民地責任」の研究

近年、世界の各地で、植民地支配の被害に対する謝罪や補償を求める動きが顕在化している。それらは、植民地支配を受けた人々の歴史意識の変化を表わしており、政治的独立を経た後の、「脱植民地化」の新たな段階を示すものである。それらの動きはしばしば、狭義の植民地時代のみでなく、奴隷貿易・奴隷制の時代までも視野に入れており、また、戦争犯罪、ジェノサイド、先住民問題、マイノリティ問題、ジェノサイド等、他の大規模人権犯罪の被害者の権利回復をめぐる動きとも連動している。

本研究では、そのような歴史意識の変化の背後にある旧植民地・宗主国の関係をとらえるために「植民地責任」の概念を用い、アフリカをはじめ、アジア、中南米、太平洋地域など世界のさまざまな旧植民地地域の人々の歴史意識の変容を比較史的にとらえることで、脱植民地化の歴史過程の研究に新たな地平を切り拓くことを目指している。

[主査]	永原 陽子		
[所員]	栗原 浩英		
[共同研究員]	浅田 進史	阿部 小涼	網中 昭世
	粟屋 利江	飯島みどり	今泉裕美子
	大井 知範	大峰 真理	小山田紀子
	尾立 要子	後藤 春美	小林 元裕
	柴田 暖子	清水 正義	鈴木 茂
	高林 敏之	津田 みわ	中野 聡
	浜 忠雄	平野千果子	
	船田クラークセンさやか		前川 一郎
	真城 百華	溝辺 泰雄	吉澤 文寿
	吉田 信	渡辺 司	



南アフリカ共和国ケープタウン沖、ロベン島(ネルソン・マンデラの収容されていた監獄島)のイスラーム聖者廟 撮影者：永原陽子



## 共同研究プロジェクト

# 一般共同研究プロジェクト

### ペルシア語文化圏の歴史と社会

「ペルシア語文化圏」はおおよそ11世紀から19世紀のいずれかの時期にペルシア語を文学語、行政語として用い、ペルシア語文化の影響を強く受けたイラン、アフガニスタン、インド、マウラアナフル、アナトリアを中心とした地域を指す。この概念は日本では近藤(2000)を契機に用いられるようになり、2004-2006年度の北海道大学スラブ研究センターCOEにおいても共同研究が行われ、AA研でもシンポジウムが開催され、言語的に重層的な構造を持ちつつもペルシア語を軸に行われた文化交流の諸相がかなりの程度明らかとなった。しかし、この概念については検討すべき点が依然残っている。

本プロジェクトではこれを発展的に継承し、より幅広い分野の専門家を結集して研究会を開催し、「ペルシア語文化圏」概念についてその有効性と限界を、実証研究に基づいて検討する。また、先行する科研プロジェクトと連携して活動を行う。

[主査]	近藤 信彰
[所員]	羽田 亨一 太田 信宏 ティムール・ベイセンビエフ
[共同研究員]	赤坂 恒明 秋葉 淳 阿部 克彦 磯貝 健一 大河原知樹 大稔 哲也 小野 浩 川口 琢司 川本 正知 後藤 敦子 小牧 昌平 清水 和裕 菅原 陸 菅原 純 高松 洋一 中西 竜也 春田 晴郎 深見奈緒子 藤井 守男 前田 弘毅 真下 裕之 間野 英二 守川 知子 森本 一夫 矢島 洋一 山口 昭彦 渡部 良子

### チベット=ビルマ系言語から見た文法現象の再構築1: 格の体系とその周辺

文法現象が「なま」のものでなく、分析することによって立ち現れて来るものならば、観察する視野の拡大と深化によって文法現象は「再構築」されるものであり、またされるべきものである。本プロジェクトは、そういう意味での文法現象の再構築を、この十数年で個別言語の記述の蓄積にめざましい進展をみたチベット=ビルマ系諸言語の研究者が、各自の掘り起こしてきた言語事実と、それらを観察し記述する視点の広がりや深さを共有することによって行なおうとするものである。対象とする文法現象は、文とりわけ単文の構造の根幹にかかわる格の体系と、それに関連する諸現象である。

[主査]	澤田 英夫
[所員]	星 泉 荒川慎太郎
[共同研究員]	池田 巧 海老原志穂 岡野 賢二 加藤 昌彦 桐生 和幸 白井 聡子 鈴木 博之 高橋 慶治 西田 文信 林 範彦 本田伊早夫



カチン諸民族(いずれもチベット=ビルマ系に属する)の祭の中でもっとも有名なマナウ祭の踊り。  
(2007年1月10日、ミャンマー連邦カチン州ミッチーナ、シャタブルー地区、マナウ祭場にて) 撮影者: 澤田英夫

## 社会空間論の再検討—時間的視座から

グローバル化の進行のなかで、人類学は村落などの共同体を、境界づけられた小規模社会として閉じたものと仮定することがますます困難になっている。人類学の従来の対象そのものが変化するにつれて、人類学においても「境界づけられたフィールド」から「移行するロケーション」へとその対象をシフトさせる方向が見られる。これは、フィールドワーク実践をフィールドワークという方法論は残しつつ、その主要な学問的関心を、フィールドワークを行っている人類学者自身の行為や関係性に集中させていく傾向が強まっているということである。しかし、本プロジェクトの「社会空間」論は、このような近年の自己に収斂していく「ポストモダン人類学」とは袂を分かたず、「社会空間」とは、具体的な人々の生と社会関係が現実の行為によって築きあげられていく生きる現場そのものをさす。特に、グローバル化によって移動やコミュニケーション手段が飛躍的に拡大しても、心、身体、モノ、活動が日常の実践として組織されていく場所が存在することに注目する。その一方で「社会空間」論は、従来の構造やシステムとして人類学者や社会学者が生きた社会関係を還元した抽象化モデルによって把握しようとする試みとはまた異なる。あくまで日常から離れた超越的モデルに抗して、人々の日常の実践の場や過程を経験のなかから生の現場を捉えていく試みである。本プロジェクトは「社会空間」論に時間的視点を導入することで、その理論的射程をさらに深化/拡大させることを目指す。

[主査]	西井 涼子			
[所員]	河合 香史	椎野 若菜	床呂 郁哉	
	三尾 裕子			
[共同研究員]	石井 美保	今村 真介	岩谷 彩子	
	春日 直樹	古谷 伸子	佐藤 知久	
	高木光太郎	田中 雅一	田邊 繁治	
	土佐 桂子	名和 克郎	檜垣 立哉	
	平井京之介	箭内 匡		

## 「シングル」と社会—人類学的研究

本プロジェクトは、社会におけるシングルとしての個人に注目し、その生き方の実態を通文化的に比較研究するものである。シングルと社会のあり方、とくにシングルの生きる戦術を人類学的に明らかにするものである。こうした作業により、固定されがちなシングルに対する現代的な社会理念を文化人類学の立場から検討することをめざす。

現代社会における個人の生き方は多様化してきている。たとえば非婚者、未婚の母、寡婦／寡夫、出稼ぎ者とそのパートナー、老齡のシングル、といった社会的背景や条件をもつ人びとがいる。社会は、こうした単身者をどのように位置づけ、対応してきたのだろうか。ジェンダーや社会的地位による違いはあるのだろうか。そうした社会的理念は、どのように変化しているのだろうか。

まず、これまでの個人についての哲学的研究や社会学的研究、社会史研究における研究成果を概観し、その歴史の変遷をとらえていく。そのうえで、宗教、社会組織、歴史的背景、地域文化的背景の異なる諸社会におけるシングルの多様な生き方の実態と各社会に通底する社会的理念とのほごまを、現代社会批判という意図を含み文化人類学的な視点を中心にさぐるものである。

[主査]	椎野 若菜			
[所員]	西井 涼子			
[共同研究員]	石井 美保	上杉 妙子	植村 清加	
	宇田川妙子	岡田 浩樹	小田 亮	
	國弘 暁子	小馬 徹	高橋絵里香	
	田所 聖志	田中 雅一	棚橋 訓	
	花淵 馨也	馬場 淳	細谷 幸子	
	森 明子	八木 祐子		



キオスクを営むルオの寡婦とその友人 撮影者：椎野若菜



## 共同研究プロジェクト

### 一般共同研究プロジェクト

#### 「もの」の人類学的研究 —もの、身体、環境のダイナミクス

本プロジェクトは人間世界を取り巻く多様な「もの」をテーマとして人類学的視点から研究を行うものである。特に本プロジェクトではアジアやアフリカをはじめ各地で豊富な調査経験を持つ複数の人類学や関連分野の研究者の参加と協力によって、「もの」と人間社会との複雑で多様な関係について、環境や身体というキーワードを参照しながら学際的な共同研究として実施するものである。ここで「環境」に加えて「身体」というキーワードが出てくる理由は、「もの」の生産や加工(あるいは利用)などの現場において、身体化された暗黙の実践的知識や各種の身体技能などが大きな役割を果たすと指摘されることが少なくないからである。このため本プロジェクトでは通常のプロジェクト研究会の開催に併せて、国内各地における各種の「もの」の生産や利用の現場を見学するエクスカージョンを同時に実施することで、「もの」に関わる身体的実践のあり方を実地に検証することも大きな特徴としている。

[主 査]	床呂 郁哉			
[所 員]	西井 涼子	河合 香史	椎野 若菜	
[共同研究員]	今堀 恵美	岩谷 彩子	印東 道子	
	内堀 基光	春日 直樹	金子 守恵	
	川田 順造	窪田 幸子	黒田 末寿	
	五島 朋子	湖中 真哉	菅原 和孝	
	砂川 和範	関本 照夫	田中 雅一	
	土佐 桂子	山越 言	山本 真鳥	



仕立て屋をして生計をたてる寡婦 撮影者：椎野若菜

#### 表象に関する総合的研究

このプロジェクトは、まえのプロジェクト「旅と表象の比較研究」を継承しつつ、「人間にとって表象とは何か」という問いに対し、問題提起を行うことを目的とする。主に以下の三点について研究を行う。

- (1) 「表象としてのX」・・・Xには、他者、土地、場所、宗教(神、死者等)、自然(風景、動植物等)、政治、などが考えられ、それらに関する具体的な研究。
- (2) 表象に関する理論的、精神史的研究。
- (3) 表象媒体に関する認知科学的研究。

[主 査]	高知尾 仁			
[所 員]	深澤 秀夫	小田 淳一	真島 一郎	
[共同研究員]	浅井 雅志	荒木 正純	今村 真介	
	彌永 信美	齋藤 晃	田中 純男	
	原 毅彦			

#### 朝鮮語史研究

朝鮮語は朝鮮半島で話されている言語であり、日本語同様、その起源や系統関係が不明な言語である。また朝鮮語は15世紀半ばにハングルが創製されるまで固有の文字をもっていなかったため、朝鮮語史の研究はより困難なものになっている。

それに加え、従来の朝鮮語の研究はそれぞれの研究者が特定の時代の朝鮮語について研究することが主で、朝鮮語史を研究する者同士が相互に協力することによって朝鮮語史全体の流れを追求するということがなかった。

そこで本プロジェクトでは、古代～近代に至る朝鮮語の研究者が集まり、各時代の朝鮮語について、音韻・文法・書誌学等さまざまな側面からの分析を試みる。

2007年度は、年2回の研究会を企画する(1回に1～2名程度の研究発表を予定)。

[主 査]	伊藤智ゆき			
[所 員]	荒川慎太郎			
[共同研究員]	伊藤 英人	門脇 誠一	岸田 文隆	
	趙 義成	陳 南澤	辻 星児	
	南 潤珍	福井 玲	藤本 幸夫	

## 宣教に伴う言語学

「宣教に伴う言語学」とは、所謂「大航海時代」のキリスト教布教に伴う言語研究活動を指し、英語では既にMissionary Linguisticsの語で定着している。

主たる資料となる文献は、16～17世紀のスペイン・ポルトガルによる宣教活動に伴って生産された文法書、語彙集、辞書・字書、教義書、修徳書、その他の布教関連書籍、及び関連歴史文書(規約、年報、報告、書簡など)である。

プロジェクト研究の目的は、次の通り。

(1) 従来の日本の「キリシタン文献研究」の成果を以て、国際的な「宣教に伴う言語学」の共同研究活動の水準の向上に寄与する。

(2) 対訳辞書類に重点を置き、15～17世紀のスペイン・ポルトガルに於ける辞書編纂史、同時代の日本に於ける辞書・字書編纂史を基礎とし、日本語以外の他の言語(例:コンカン語)の対訳辞書も素材として、辞書編纂史・語彙研究史の論点を整理する。

(3) 宣教活動に伴って生産された各国語の文法書類の文法カテゴリーの仕分け・対照等の対照研究、関連歴史文書類の書誌学的研究など、従来の日本の「キリシタン文献研究」の延長上にありながらも殆ど手つかずの状態にある領域に踏み出す。

[主 査] 豊島 正之

[共同研究員] 岸本 恵美 白井 純 丸山 徹



ベトナム中部ホイアン、華人の家屋に貼られた旧正月祝いの赤紙。  
撮影者：澤田英夫

## 中国系移民の土着化／クレオール化／華人化についての人類学的研究

本研究では、海外中国人(本研究では、地政学的な「中国」の外に移住した中国系の人々を指す用語として用いる)を対象に、海外中国人を同質的、単一的に表象する従来の人文・社会科学の諸研究に共通した分析視点を批判的に再検討し、新たな海外中国人像(華人／チャイニーズ・クレオール等)や「民族」概念を再構築することを目的とする。具体的には、以下の諸点を明らかにする。

(1) 従来の諸研究において等閑視されてきた、周縁的存在となり土着化が進んだ中国系住民および多民族文化との混淆としてのチャイニーズ・クレオール等を中心とする多様な海外中国人に注目し、それらの人々が構成する様々な社会文化の実態、そしてそれらの人々のアイデンティティ形成過程を分析する。

(2) ホスト社会と中国系住民との相互作用、国民国家化の過程、ローカル／グローバルの関係性から生じる、中国系住民が関わる民族カテゴリーとそのエスニック・ポリティックスの実態を把握する。歴史過程の中で中国系住民の土着化、クレオール化、或いは「中国人化(華人化)」という異なるベクトルが、必ずしも時系列的にはなく、時に同時並行的に進んで来たことや、土着化やクレオール化の道を歩んだ海外中国人のある一部分が、特定の政治的、経済的な要因によって中国人の範疇から捨象されたことを明らかにする。

(3) 土着化あるいはクレオール化した海外中国人という周縁性の排除によって、本質主義的な「華僑」「華人」像が想像されるプロセスを明らかにする。なお、本プロジェクトは、2004年度より開始された科研費基盤A「東南アジアにおける中国系住民の土着化・クレオール化についての人類学的研究」と連携し、現地調査を踏まえた研究を行っている。

[主 査] 三尾 裕子

[所 員] 西井 涼子

[共同研究員] 赤嶺 淳 板垣 明美 市川 哲

甲斐 勝二 紀 宝坤 木村 自

桑山 敬己 貞好 康志 末成 道男

菅谷 成子 芹澤 知広 田村 和彦

田村 克己 中西 裕二 信田 敏宏

舩谷 鋭 宮下 克也 宮原 暁

山本須美子 王 維





## 共同研究プロジェクト

# 一般共同研究プロジェクト

### タイ文化圏における山地民の歴史的研究

中国西南部から大陸東南アジア北部に跨がるタイ文化圏の歴史においては、タイ系民族の盆地政権がその周辺の山岳地帯に居住する山地民を緩やかに「統治」した。19世紀以降、タイ文化圏は中国、ミャンマー（ビルマ）、タイ、ラオス、ヴェトナム及びインドの6カ国に組み込まれて、盆地政権は消滅した。盆地政権の領民はこの六つの近代領域国家に同化を強要されたものの、タイ文化圏はなお存続している。これまで研究者は、盆地政権中心にこの地域全体の歴史を再構築してきたが、山地民が盆地政権の存続を揺るがす存在であるにもかかわらず、山地民の歴史的役割を重要視してこなかった。本プロジェクトの目的は山地民の歴史的役割を明らかにして、その役割を総合的に概念化することによってタイ文化圏の歴史的形成を再解釈することである。



センジュムのわんぱく坊主 ミャンマー（ビルマ）シャン州、チェントウン、センジュム村にて。撮影者：唐立

このような再解釈によって、これまでタイ系民族側から叙述されたタイ文化圏の歴史がもっと公平に見られるようになると期待できる。これまで山地民が果たした歴史的役割を重視しなかった理由としては、以下の2点が挙げられる。第一に歴史家は、この6カ国における近代国家の建国に貢献した文化や民族が果たした役割を強調する視点から歴史を再構築してきたが、山地民は貢献度が少ないため等閑視されてきた。第二に、研究者は各民族集団の固有な文化と歴史の解明を目的に、個別的に研究してきたため、山地民が共通に経験してきた歴史という視点が見落とされてしまった。夥しい数の民族集団が居住する地方はそれぞれ異なるが、その歴史体験の共通性を明らかにする視点を採用する手法によって、タイ文化圏の歴史に対する統一的理解を深化させることを、本プロジェクトは目指している。

山地民の歴史研究には史料的な制約があり、先行研究も乏しいため、プロジェクトの運営上以下のような措置をとる。山地民の多くは自己の文字を有しないので、盆地のタイ系民族や、中国とビルマ王朝の史料、及び西洋人など、外部の人間の手による資料に依存せざるを得ない。そのため歴史学者以外にも言語学や文化人類学などの専門家の参加によって学際的なアプローチを採用する。2年目に当たる2007年度においては、2006年度3回目の研究会で作り上げた最終的な研究枠組みに基づいて、1年間の研究会活動を実行している。なお、本プロジェクトは、2005年度から開始された科研費基盤研究B「言語・文化調査に基づくパラウン史の解明」と連携し、現地調査を踏まえた事例研究の分析も行なう。

[主査]	クリスチャン・ダニエルス
[所員]	新谷 忠彦 陶安あんど
[共同研究員]	飯島 明子 池田 一人 榎永真佐夫
	片岡 樹 加藤 高志 小柳 美樹
	武内 房司 長谷千代子 村上 忠良
	山田 敦士



センジュムのわんぱく坊主 ミャンマー（ビルマ）シャン州、チェントウン、センジュム村にて。撮影者：唐立

## 東アジアの社会変容と国際環境

近年における国際情勢の変化と学術交流の発展によって、われわれ歴史学研究者は東アジア各地域の文書館・図書館などに所蔵される一次資料に対し、以前とは比べられないほど容易に接近できるようになった。さらに現地学界でも、あらたな歴史評価・研究動向がおり、われわれの研究への刺激となっている。ただ対象とすべき史料の量があまりに膨大で、その実態を体系的に把握してはいない。また、個別の研究が深化するとともに、より大きな視野のもとに、問題をとらえなおし、分析枠組みを再検討することも必要である。さらに海外学界との共同研究、史料調査も、双方にとって、より具体的で実りの多い形で推進しなければならない。

本プロジェクトでは、このような研究状況を念頭におきながら、18世紀から20世紀初頭の東アジア世界各地における社会の変容が、外部世界とどのように有機的に関連していたかという問題を中心にすえ、文書史料によりそれがどこまであきらかにできるか検討する。東アジアに関する史料と研究情報の開かれたフォーラムをめざしている。毎回テーマをかえながら、海外からのゲスト・スピーカーもまじえ、シンポジウム形式で研究会を開催し、また『東アジア史資料叢刊』などの出版物も刊行している。

[主査]	中見 立夫		
[所員]	クリスチャン・ダニエルス	栗原 浩英	
[共同研究員]	赤嶺 守	石井 明	石川 禎浩
	井上 治	井村 哲郎	江夏 由樹
	岡 洋樹	岡本 隆司	笠原十九司
	加藤 直人	川島 真	貴志 俊彦
	岸本 美緒	楠木 賢道	佐々木 揚
	新免 康	菅原 純	寺山 恭輔
	西村 成雄	萩原 守	浜下 武志
	原 暉之	平野 聡	ブレンサイン
	細谷 良夫	松川 節	松重 充浩
	毛里 和子	森川 哲雄	柳澤 明
	吉澤誠一郎	吉田 豊子	

## マルセル・モース研究—社会・交換・組合

本プロジェクトでは、フランス社会学・民族学の基礎をきずいたマルセル・モースの業績を、書評・時事論説・講演録・未定稿なども含めた、そのほぼ全作品について横断的に吟味しながら、個人と国家のはざまに位置するものとして構想された「社会 *société*」とは何であり、また何でなかったのかを、今日の視点から再検討する作業がめざされている。

とりわけ、学問形成期のサンسكريット研究から20世紀転換期の供儀論、呪術論をへて、やがて『贈与論』(1925年)で表明されることになる「交換」の民族学的モチーフが、同じ両大戦間期(=第三インターナショナル/コミンテルン期)に発表された一連の協同組合論、ポリシェヴィズム論、暴力論、ナシオン論などと、また他方における個体論、身体論、人格論、技術論などと、「社会」学的次元でいかなる理論的連関により繋がっていたかが、共同研究の中心的論点となる。

『民族誌学の手引き』の著者は、法・道徳・貨幣・革命のかなたに、どのような凝集力をそなえた「社会」の姿を夢みていたのか。それはまた、今日のアジア・アフリカ諸国における「社会」の動態と、なんらかの接点をもちうる夢だったのか。

[主査]	真島 一郎
[所員]	深澤 秀夫 高島 淳
[共同研究員]	泉 克典 小杉麻李亜 関 一敏 渡辺 公三



モースの『リュマニテ』誌記者証明書(1905年)



## 共同研究プロジェクト

### 一般共同研究プロジェクト

#### ドイモイの歴史的考察

ドイモイ(刷新)政策がベトナム共産党の公式な政策として提起されてから、すでに18年が経過しようとしている。この間に、ドイモイはベトナムの党・国家の諸政策(政治・経済・軍事・外交・文化等)、社会、国民の価値観のあり方に大きな変化をもたらした。同時にその問題点も顕在化しつつあり、今やドイモイを総括すべき時期に入っているといつてよい。

しかし、この間にドイモイを対象とした研究はどれほど進展したといえるだろうか。国内外のドイモイ研究に目を向けると、分野ごと(政治、経済、外交、軍事、法律など)のアプローチや各種調査の類が多く、ドイモイの全体像が見えないものが多い。とりわけ、ドイモイ研究の展開に際して不可避であると思われる次の2点に関して、議論が深化されないままの状態を続けておくことは許されないであろう。それは、第一に、ドイモイの起源に関わるテーマであり、その中には、(1)ドイモイの開始に際しての南ベトナムの役割、(2)レ・ズアン時代末期(1979年-85年)の一連の改革政策(通貨改革、農業における生産物請負制など)とドイモイの関連性をどのように評価するかという問題が含まれる。第二には、一党独裁下における市場経済導入、経済発展優先志向などの点で、ドイモイと共通すると思われる改革政策が他国にも存在する(した)事実に着目して、ドイモイを一国の枠組から脱却して考察する必要があるのではないかということである。具体的な事例としては、(1)ドイモイの始動段階におけるソ連のペレストロイカとの関連性、(2)中国の改革・開放政策とドイモイの関連、(3)開発独裁体制との類似性などがあげられる。

本プロジェクトは、以上のような問題認識に立って、大きく二つのアプローチに依拠しながら、ドイモイ研究の新境地開拓をめざそうとするものである。第一には、ドイモイにおけるベトナム固有の要因を探究するために歴史的なアプローチを援用していく。具体的なテーマとしては、(1)ドイモイの起源に関わる諸問題(南ベトナムの存在とドイモイ、レ・ズアン時代末期の改革政策の位置付け、北部におけるドイモイに先行する諸現象、ソ連におけるペレストロイカの影響)(2)ドイモイ以前の旧体制=集団主義体制の構造を明らかにするとともに記録する、(3)ドイモイにおける根幹部分と付随的な部分は何か、(4)ドイモイにおける社会主義的性格はどこに残存しているのか、があげられる。第二には、体制比較を通じて、ドイモイのもつ普遍的な側面を解明することである。比較の対象としては、中国の改革・開放政策、ラオスの新思考政策、移行経済諸国(旧ソ連、東欧など)、インドネ

シアの開発独裁体制が想定されるが、比較するための基礎を厳密に定義するとともに、体制間の接触、相互作用にも注意していく。

[主査]	栗原 浩英			
[共同研究員]	石井 明	今村 宣勝	加藤 弘之	
	白石 昌也	鈴木 基義	竹内 郁雄	
	根本 敬	古田 元夫		

#### マレー世界における地方文化

国家としてのインドネシア、マレーシアを包含する広義の「マレー世界」の多様な地方文化に関する人類学的な研究はこれまでも行われてきた。しかし、多くの地方に残る現地語文書に関しては、人類学、歴史学いずれの分野からも着目されていない。これらの文書の中には、各地方の文化の形成や変遷に関する興味深い資料が含まれており、あらたな資料の宝庫である。本計画は、これらの文書を中心に、地方文化の形成過程に関する研究を行うものである。本計画はいくつかの関連事業を有する。2007年度においては、東南アジア・イスラーム地域における人間集団分類概念に関する国際シンポジウムを他機関と共同して開催する。

[主査]	新井 和広			
[所員]	塩原 朝子	宮崎 恒二	床呂 郁哉	
[共同研究員]	青山 亨	オマール・ファルーク		
	奥島 美夏	川島 緑	久志本裕子	
	国谷 徹	黒田 景子	小林 寧子	
	塩谷 もも	篠崎 香織	菅原 由美	
	坪井 祐司	東長 靖	富田 暁	
	中田 考	西 芳美	西尾 寛治	
	服部 美奈	水上 浩	山口 裕子	
	山本 博之			

## 東地中海地域における人間移動と「人間の安全保障」

東地中海地域は、商業・巡礼・移民など、古代より活発な人間移動と諸集団の交流の場を提供してきた。人類史上、グローバル化のプロトタイプを最初に経験した地域といえよう。日常的異文化接触のなかで他者を受容し安全を保障するシステムについては、確固たる伝統の存在が認められる。

一方、現在の東地中海地域にはパレスチナ問題やキプロス紛争をはじめ、人間移動を伴う深刻な民族・宗派問題が多数存在する。これらの問題は、ゲーム論的な国際政治の枠組のなかで分析されることが多く、現地の文化的・社会的文脈のなかに位置付ける作業は軽視されてきた。

本研究プロジェクトは、人間の空間的移動と社会移動を総合した「人間移動 (Human Mobility)」を鍵概念として援用し、民族的・宗派的に多様な構成をもつ東地中海地域の諸社会が、現在深刻な内部対立を孕む危機的状況に至った過程を検証するとともに、安全保障の規範や共存の論理を、人間移動の過程とそれを取り巻く環境のなかに発見し、「人間の安全保障」の議論に新たな視角を提供することを目指す。

なお、本研究プロジェクトは、科研費による「新たな東地中海地域像の構築」プロジェクトと連動して進められている。

[主査]	黒木 英充			
[所員]	飯塚 正人	小田 淳一	床呂 郁哉	
[共同研究員]	白杵 陽	小副川 琢	粕谷 元	
	北澤 義之	栗田 禎子	佐藤 幸男	
	佐原 徹哉	澤江 史子	末近 浩太	
	土佐 弘之	長沢 栄治	中村 妙子	
	錦田 愛子	間 寧	堀井 優	
	前田 弘毅	松井 真子	黛 秋津	
	村田奈々子	森 晋太郎	家島 彦一	
	屋山久美子	吉村 貴之		



19世紀後半のペイルート。地中海と冠雪したレバノン山脈。

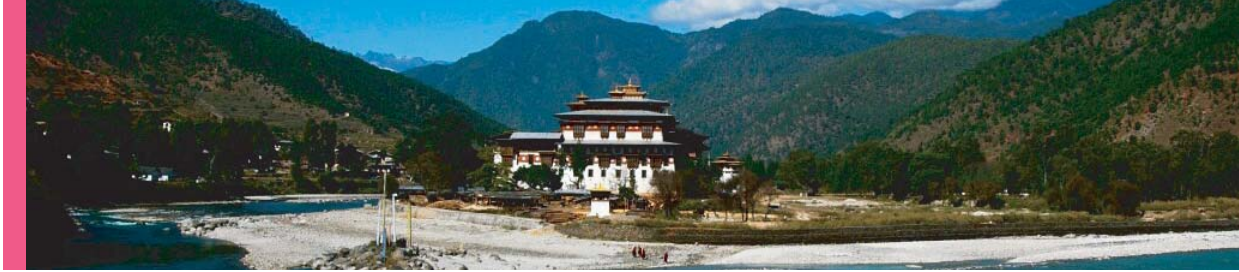
## ムスリムの生活世界とその変容 —フィールドの視点から

本プロジェクトは、世界総人口の2割ほどを占めるとされる世界各地のムスリム(イスラームの信者)の生活世界の実態を民族誌的アプローチから探るとともに、比較を通してそれらに見られる共通性・普遍性と地域・時代ごとの特殊性の双方を明らかにすることを主な目的とする。対象とする地域は、これまでのイスラーム研究において中心とみなされてきた中東のみならず、サハラ以南アフリカ、南アジア、中央アジア、東南アジア、東アジアを含み、さらに欧米などのムスリム・マイノリティ社会も視野に入れる。

主要な研究テーマとしては、衣食住をはじめとする、ムスリムの日常生活に見られる些細な社会的・文化的現象の検討を出発点とし、それから国家や国際レベルにおける政治・経済的大状況を考察するというボトムアップ的視点、すなわちフィールドの現実を重視する社会・文化人類学や地域研究的な方法を重視する。それと同時に、イスラーム学の専門家にも参加してもらい、ローカルな場における民族誌的事実とより普遍的なイスラームの法学・神学的解釈との異同も検討する。また、今日のムスリム社会が、一方ではイスラーム復興のさまざまな兆候を見せているとともに、他方では近代化・世俗化・グローバル化などの影響を強く受けていることを考慮し、その現代の変容のあり方にも注目しつつ研究を進める。

なお、本プロジェクトは、AA研が主体となり2005年度から発足した拠点形成事業「中東イスラーム研究教育プロジェクト」の一環でもある。

[主査]	大塚 和夫			
[所員]	新井 和広	飯塚 正人	黒木 英充	
	近藤 信彰	床呂 郁哉	真島 一郎	
	宮崎 恒二	椎野 若菜		
[共同研究員]	青柳かおる	赤堀 雅幸	新井 一寛	
	石原美奈子	白杵 陽	宇野 昌樹	
	大川真由子	大坪 玲子	大稔 哲也	
	奥野 克己	菊地 滋夫	小杉 泰	
	小牧 幸代	斉藤 剛	坂井 信三	
	澤井 充生	清水 芳見	鷹木 恵子	
	高田 峰夫	多和田裕司	東長 靖	
	外川 昌彦	中田 考	長津 一史	
	中山 紀子	縄田 浩志	子島 進	
	信田 敏宏	花淵 馨也	堀内 正樹	
	三尾 稔	村上 薫	山岸 智子	
	吉田世津子			



## 共同研究プロジェクト

# 一般共同研究プロジェクト

### 人類社会の進化史的基盤研究(1)

本研究プロジェクトは、人類社会を霊長類から現生人類に至る進化の軸上で比較考察し、人類学における社会理論の新たな展開をめざそうとするものである。それによって人類の「文化」が社会形成にいかに関与しているかを再考する。

社会理論のなかで第一に問題となる「集団」に焦点を当てる。「集団」の概念を霊長類進化史上におくことにより、この概念の自明性を崩し、個体レベルの自他認識を越え「他集団」なる抽象的な他者の生成に到る「集団」の成りたちをふくめ、「集団」の認識(perception)の生成と展開を進化史的な視点から検討する。これにより、他者認知やアイデンティティといった個体間関係、およびテリトリーの生成とその認知、規則の発生と定着の過程といった個体間関係を越えた社会事象に至る問題群に迫る。

社会事象にあつて、「集団」は比較的顕在化(目に見えやすい)したものである。したがつて「人類社会の進化史的基盤研究」というときに、広く霊長類学的知見を含めて、人類史的規模での比較の橋頭堡が築きやすい。長期的なプロジェクト研究としては、継続的に「所有」、「制度」などを扱つてゆく予定であるが、その第一歩として、今回のプロジェクトを位置づけている。

共同研究員として、霊長類学の分野からは霊長類社会学および霊長類生態学の専門家、人類学の分野からは生態人類学、文化・社会人類学、人類生態学の専門家を加えている。これに社会思想史の専門家に参加してもらうことにより、霊長類から人類への架橋の理論的意義を考察する示唆を得たいと考えている。

また副次的な効果として、近年、社会生物学、行動生態学への理論的特化という傾向を強めつつある霊長類学研究を、人類との関係に再び位置づけることにより、日本における霊長類学および生態人類学の創成契機であつた人間存在の根源的かつ多元的理解という学的動機を回復しうることが期待される。

[主 査]	河合 香史				
[所 員]	西井 凉子	椎野 若菜	床呂 郁哉		
[共同研究員]	足立 薫	伊藤 詞子	内堀 基光		
	梅崎 昌裕	大村 敬一	北村 光二		
	黒田 末寿	杉山 祐子	曾我 亨		
	田中 雅一	寺嶋 秀明	中川 尚史		
	早木 仁成	船曳 建夫			



## 共同研究プロジェクト

# 所外代表による共同研究プロジェクト

### 漢字字体規範史の研究

中国・日本での漢字の字体規範の歴史を描くために、後代の字体の規範となった主要文献を厳選し、その一字一字(単字)の画像を切り出して整理し、文献の編纂地域・時代・刊本写本の別・料紙・装幀などの附随情報と共に取得・対照可能な「漢字字体規範データベース」を拡張・編纂して、「字体規範の編年」を試みるプロジェクト。

実際の画像撮影・文字画像切り出し・関連データ入力の作業は、中国(明まで)・日本(中世まで)・朝鮮(参考のため数点)・ベトナム(同左)と、日本近世・近代とに分割して行なうが、本

プロジェクトは、その両者を統合して「字体編年・字体規範の編年」に伴う諸問題を共有し・検討するために、共同研究プロジェクトとして行なうものである。

尚、本プロジェクトの前身「漢字字体規範データベース」HNGは、「東洋文字文化の継承と発展に寄与する優れた業績」であるとして昨年(2006年)6月、第一回「白川静記念東洋文字文化賞」を受賞した。<http://www.joao-roiz.jp/HNG/>

[主 査]	石塚 晴通 (北海道大学名誉教授)
[所 員]	豊島 正之
[共同研究員]	池田 証寿 岡墻 裕剛 小池 和夫 小宮山博史 高田 智和 府川 充男

### 語彙と文法

世界には多くの言語があり、その構造は多様である。そしてその構造に応じて、辞書・語彙集の形も変わってくる。例えば、英語やフランス語では、文法を知らなくても辞書はひける。単語の文法的变化が乏しく、出来合いの単語をそのまま辞書の見出しとしているからである。しかし、ドイツ語やロシア語では、出来合いの単語が見出しとはいえ、名詞なども変化するため、多少の文法的知識が必要となる。これがアラビア語になると、単語の基本は3子音であり、個々の単語はこれに様々な母音を組み合わせることによって形成される

ため、単語を見出しとすることは通常しない。またアメリカインディアン諸語などでは、複統合、抱合その他の現象により単語を見出しにすることは不可能な言語が多い。その場合、形態素が辞書の見出しとなることが多い。

本プロジェクトは、世界の様々な言語の辞書・語彙集を作成している研究者が、文法構造など言語の特徴性を、その語彙構造を通して考察しようとするものである。

[主 査]	梶 茂樹 (京都大学)
[所 員]	荒川慎太郎 星 泉 町田 和彦
[共同研究員]	中島 久 藪 司郎

### インドネシアの国語政策と言語状況の変化

スハルト体制の終焉とともに、イデオロギーとしてのインドネシア語国語政策の下にこれまで封じ込められていた民族言語(地方語)が解放され、公共の場においてより自由な言説が生まれてきている。加えて、英語や中国語が都市部を中心に日常生活の中にこれまで以上に入り込んできている。これらの現象は、これまでのインドネシア語が担ってきた役割に変化が生じ、インドネシアの言語の様態に変化が生じていることを示唆しているように思われる。本プロジェクトでは、まず1945年の独立以降、インドネシア語が各地域社会においてどのように認識され、どのように「発展」してきたのか、インドネシア語とは何だったのかを再考することから始める。インドネシアの人々にとって国語とは何なのか、インドネシア語が国語と定められ、いかにして国語となっていた(ならなかった)のか、地域社会の言語(地方語)との関係性はどのようなものなのか。これらの

問題を、言語学、言語政策、文化人類学、社会学、メディア論、政治学、歴史学、文学、アイデンティティ、グローバル化などの観点から議論していく。

また、強権的な政治体制が崩れた頃から多様なメディアを通してグローバル化の影響がインドネシア社会に浸透して(外からの動き)きているが、一方で中央に対する地方の自治権も拡大(内からの動き)してきた。外からと内からの新しい動きが、どのようにインドネシアの言語状況に変化をもたらしたのか、今後もたらしていくと考えられるのかについても議論していきたい。

[主 査]	森山 幹弘 (南山大学)
[所 員]	塩原 朝子 宮崎 恒二
[共同研究員]	ウガ・ベルチェカ 鏡味 治也 柏村 彰夫 北村 由美 白石 さや 津田 浩司 長津 一史 原 真由子 舟田 京子